

■講師

織田 隆司（愛媛大学 医学部総務課 副課長）

平成7年高知医科大学事務職員に採用。これまで弓削商船高等専門学校，大学評価・学位授与機構，愛媛大学で勤務。愛媛大学では経営企画課，財務企画課，学長秘書室，教育企画課等を経験し，平成29年度から現職。平成22・23年度に次世代リーダー養成研修を受講。平成28年度SPOD-SDC認定。

■プログラム概要

キャリアとは、「人が，生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と定義されています。

大学を取り巻く状況は年々厳しさを増しており，大学職員の業務は質・量ともに増加しています。また，社会環境の変化とともに，学校教育においてはキャリア教育が取り入れられています。

このプログラムは，大学等の職員として働き始めてある程度経ったみなさんが過去を振り返り，自身の興味や適性を確認して参加者間で共有することによって，これからの自身のキャリアを考える機会とするものです。

自身を知り，参加者の皆さんと一緒にこれからの自身のキャリアを考えてみましょう。

■主な受講対象

採用10年程度までの若手職員で，キャリアについて考える時間を持ちたい職員の方。

■本プログラムの到達目標

1. キャリアを考える必要性を説明することができる。
2. 自身の興味・適性・能力（キャリア・アンカー等）を知り，他者に説明することができる。
3. これから自身が必要な行動（アクション）を作成することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2301B

反転授業をやってみよう —橋本メソッドの実践から—

■講師

金西 計英（徳島大学 総合教育センター ICT活用教育部門，大学開放実践センター・教授）

徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年，博士（工学）を徳島大学より取得。関西学院大学，金沢工業大学，四国大学を経て，1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授。大学におけるe-Learningの開発，および運用の研究に取り組む。また，高等教育におけるICT活用の授業開発について，実践という観点から取り組む。

■プログラム概要

最近，アクティブラーニングに注目が集まっています。ここではアクティブラーニングの一種である「橋本メソッド」について紹介します。特に，「橋本メソッド」は反転授業と相性の良いことを説明し，反転授業を用いた「橋本メソッド」について示します。なお，本プログラムはワークショップ形式で，「橋本メソッド」について，体験を通し学ぶことを目指します。まずは，反転授業についての理解を目指します。次に，簡易な形で「橋本メソッド」を体験してもらう予定です。具体的な授業の手法を体験することで，自らの授業で反転授業を実施する場合，いろいろな形態へ方式をアレンジすることが容易になると思います。なお，「橋本メソッド」とは富山大学の橋本勝先生の開発した大人数向けのアクティブラーニングのことです。

1. 反転授業と橋本メソッドの紹介（ここは講義式）
2. グループを作ろう
3. グループで作業してみよう
4. グループで発表しよう
5. 作業の振り返り

■準備物や事前課題

受講者に事前の課題がある場合は，お知らせします。

■主な受講対象

アクティブラーニングを授業の中で実施してみたいけれど，踏み出せないでいる教員の方を歓迎します（アクティブラーニングの一種を，実際にワークショップの中で経験してみますので，どんなものか体験することで理解が深まると思います）。教務系の職員の方も，アクティブラーニングを実際に体験してみたいという方は歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 反転授業について授業の構成方法等について説明できる。
2. 橋本メソッドについての授業手法等について説明できる。
3. 反転授業を橋本メソッドと組み合わせて実施する手順を説明できる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2301C

教職員のための大学の危機管理 —事例から考えるハラスメント—

■講師

吉田 一恵（愛媛大学 教育学生支援部 愛媛大学 SD 統括コーディネーター/能力開発室長）
愛媛大学法文学部法学科卒業。愛媛大学広報室長，人事課長，教育学生支援部長を経て平成 29 年 4 月から現職。広報室・人事課での約 6 年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し，記者会見を所掌，報道対応マニュアル等を作成，人事課では，全事務系職員へのスタッフサポートフォリオの導入や労務・人権侵害事案に対応，教育学生支援部では，入学から就職までの学生支援活動，危機管理事案に対応するとともに，現在まで一貫して教職員能力開発拠点 SDC/SPOD-SDC として職員の能力開発に取り組んでいる。

高木 佳代子（愛媛大学 総務部就業環境推進室 副室長）
放送大学教養学部卒業。愛媛大学採用後，情報関係，共済関係及び学務関係の業務に携わる。平成 28 年 4 月から就業環境推進室にて，人権侵害事案，裁判対応，相談窓口に係る業務を担当。平成 29 年 4 月から現職。

■プログラム概要

あなたが，今，何気なく行っているその言動は，ハラスメントではありませんか？
本プログラムでは，大学等において，今，身近にあるハラスメントについて説明すると共に，ハラスメントが起こった時の初期対応，未然に防ぐための気づきについて考えます。特に，複雑かつ多様化するハラスメントについて，具体的事例を挙げながら，「ケースメソッド」により省察し，①ハラスメント認定のポイント，②ハラスメントが起きた場合の対処方法，③ハラスメント「施策」を導き出していきます。

■主な受講対象

一人一人が異なる背景をもって，勉学や仕事に臨んでいる現在，組織として，個人として，高等教育機関における

- 「・改めてハラスメントに対する基礎知識を得ようと思っている。
- ・ハラスメントに対する知識を最新のものにしたいと思っている。
- ・攻めのハラスメント防止策を考えたいと思っている。
- ・正に，ハラスメントに直面している。
- ・現に，ハラスメントを見聞きしている。」

等々を含め，全ての教職員の方々を対象としています。

■本プログラムの到達目標

1. ハラスメントについて，説明することができる。
2. ハラスメントの事実認定ができる。
3. ハラスメントに対処できる。
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 23 日（水）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2301D

データに基づいた教育改善

■講師

清水 栄子（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。2015年4月より現職。愛媛大学で教育に関わるIRを担当。SPODフォーラムでのIRに関わる研修および教職員能力開発拠点 IRer 養成講座（2014, 2016）の講師担当。教職員能力開発拠点 SDC/SPOD-SDC。

■プログラム概要

学内にはさまざまなデータがあります。しかし、そのままでは多くのデータはある事実を表した無機質なものです。データを意味のある情報へと変換することが、IRの業務の本質であり醍醐味と言われています。そのためには、データの持つ意味や他のデータとの関係など、問題意識を持って分析し、解釈していくことが必要とされます。

本プログラムでは、意味ある情報への変換、その情報をどのように解釈し、情報提供をすることによって改善へと結びつけていくのか、というステップについて実践事例を通じて紹介します。ワークや参加者の皆さんのこれまでの取組について共有していく中で、所属大学でのデータを用いた教育改善についてのヒントを見つけて頂きたいと思います。

■準備物や事前課題

教育改善に資するデータを活用した学内での取組について把握しておきましょう。

■主な受講対象

データに基づいた教育改善に興味のある教職員。経験がない方の参加を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. IRの標準的なプロセスと課題を自分の言葉で説明できる。
2. IRの知識と技術を所属大学の教育改善の具体的事例に適用することができる。
3. 多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気貢献することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2301E

FD 担当者研修

■講師

宮田 政徳（徳島大学・総合教育センター准教授）

広島大学大学院 文学研究科修了（英語学）徳島大学では、2002年より全学FD企画・運営を担当。SPODでは、2010年よりコア校徳島大学FD担当。

吉田 博（徳島大学・総合教育センター講師）

愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。

中井 俊樹（愛媛大学・教育・学生支援機構教育企画室教授）

1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手となり、同准教授などを経て2015年より現職。専門は大学教育論、人材育成論。著書に、『大学のFD Q&A』（共編著）、『アクティブラーニング』（編著）、『大学教員準備講座』（共著）などがある。

小林 忠資（愛媛大学・教育・学生支援機構教育企画室特任助教）

名古屋大学高等教育研究センター研究員等を経て、2016年より現職。FD・SDの研修講師を担当。著書に、『大学のFDQ&A』（分担執筆）、『授業設計』（分担執筆）などがある。

■プログラム概要

この講座はフォーラム初日に一日を通して行われますので、途中からの参加はできません。またこの講座では、グループワークを通してFD企画を作成しますので、できるだけ受講者は同じ大学・短大・高専からペアで参加されることを推奨します。やむを得ない場合は単独での参加も結構です。

講座の流れは、FD概論でFDとは何かというFDの理念を学びます。午後から、自大学・短大・高専のFDのニーズを講義とワークによって把握します。その後、把握したニーズに沿ってFD企画をワークによって立案して行きます。最後はグループワークによってFD企画のブラッシュアップを行った後、FD企画の発表を行います。

受講者はもし自大学等で行っているFD企画があれば、企画の要項やプログラムを持参下さい。

■準備物や事前課題

自大学等で行っているFD企画がもしあれば、自大学のFDの企画の要綱やプログラムを持参ください。

■主な受講対象

大学・短期大学・高等専門学校でFDを担当されている教職員。

■本プログラムの到達目標

1. FDとは何かを説明できる。
2. FDのニーズを把握できる。
3. FDの企画立案ができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）10：00～17：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

コミュニケーションの基礎 ーワークショップ体験から学ぶー

■講師

三隅 友子（徳島大学 国際センター 教授）

大学内では留学生の日本語教育及び一般には異文化コミュニケーションを担当。学外にて1990年より主に看護師（看護学校、病院、看護協会にて）対象の人間関係論を担当、アサーティブ・アサーション、NLP、インプロヴィゼーションを取り入れた体感するコミュニケーションのワークを展開。

■プログラム概要

生活をしていく中で、私たちは毎日人との情報と感情を分かち合う作業を行っています。何らかの支障が起きたとき、「コミュニケーション不足だった」「コミュニケーションがうまくいっていなかった」と原因をコミュニケーションに向けることが多いのも事実です。さらにコミュニケーション能力は全ての人にとって必要不可欠なものとして、教育目標に掲げられています。文化によって様々なスタイルがあり、またグローバル化する社会で必要とされるスキルもあります。本プログラムでは、コミュニケーションを言葉で説明したり、定義を覚えたりするものではなく、参加者全員が協力して様々なワーク（セッション）を体験することにより、右脳的に捉えることを試みます。ワークを体験して、実務や教育の中で各自の現場に持ち帰って実際にやってみることも可能です。

頭と身体と心をやわらかくして、一緒に見る・聞く・感じることに向き合ってみませんか。

■主な受講対象

今回のフォーラムに参加している方全てが対象となります。

ご自分自身の日常のコミュニケーションや職務や授業での人との関わり方をメタ的に振り返ってみたいという職員、教員が対象です。

■本プログラムの到達目標

1. 言語・非言語のコミュニケーションの重要さが確認できる。
2. 自分のコミュニケーションの癖を知ることができる。
3. コミュニケーションの捉え方と視点が広がる。
4. 目的達成・自己実現のための人との関わり方のヒントが得られる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

事例から学ぶ「学生」「後輩職員」との
対話型コミュニケーション講座

■講師

次世代リーダー養成ゼミナール7期生

三木 俊介（鳴門教育大学 経営企画部企画課評価係 主任）

石川 尚（愛媛大学 総務部人事課人事・人材育成チーム チームリーダー）

井上 慎二（高知大学 総務部総務課法規係 係長）

板東 博士（徳島文理大学 香川キャンパス入試広報部 事務主任）

重松 映美（聖カタリナ大学 就職課 主任）

杉原 康弘（松山大学 教務部教務課 課員）

■プログラム概要

若手職員の皆さん、学生や後輩職員との対話の中で困ったり、うまくいかなかったりした経験はありませんか？社会人として必要なコミュニケーションの基礎知識は、研修などを通じて身につけているはずなのに、なぜ困ったり、うまくいかなかったりするのでしょうか。

私たち次世代リーダー養成ゼミナール7期生も同じように悩みましたが、“雰囲気づくり”、“伝え方”、“聴き方・引き出し方”を学び工夫することで自分たちなりに解決してきました。

この研修では、私たちの経験を事例としてとりあげ、参加者間でのワークを通じて皆さん自身の悩みの解決に繋げていきます。

皆さんに「明日からの行動を変えるヒント」を持ち帰っていただくことを目指しています。

■受講者への準備物や事前の課題等

学生や後輩職員との対話の中での工夫や課題などについて振り返っていただきます。後日お送りする事前課題ワークシート（A4用紙1枚）に記入し事前にご提出ください。

■主な受講対象

採用3年以上で6年以下の職員。

■本プログラムの到達目標

1. “雰囲気づくり”のコツを2つ以上説明することができる。
2. “伝え方”のコツを2つ以上説明することができる。
3. “聴き方・引き出し方”のコツを2つ以上説明することができる。
4. 学生や後輩職員との対話型コミュニケーションにおける悩みの解決策を提案することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）13：00～17：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2302B

始めよう！アクティブ・ラーニング型授業 －協同学習入門編－

■講師

葛城 浩一（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 准教授）

平成 12 年 3 月広島大学教育学部教育学科卒，平成 22 年広島大学にて博士（教育学）の学位取得。平成 20 年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授，平成 21 年度より香川大学大学院教育学研究科を兼任。

■プログラム概要

近年，各大学にはアクティブラーニング型授業の充実が強く求められていますが，みなさんはアクティブラーニングのことをどの程度ご存知でしょうか。アクティブラーニングに関する誤った理解や情報の不足は，みなさんをアクティブラーニング型授業（の充実）から遠ざけることとなります。そこで本プログラムでは，アクティブラーニングに関する基礎的な知識を，アクティブラーニングのひとつの手法である「協同学習」を体験しながら学んでいきたいと思えます。「協同学習」とは，仲間と共有した学習目標を達成するためにペアもしくは小グループで一緒に学ぶ学習活動のことです。協同学習は，少人数講義でしか行えないように思われるかもしれませんが，各技法のポイントを押さえれば，大人数講義でも効果的に行うことができます。本プログラムを通して，みなさんのアクティブラーニング型授業の充実にお役に立てれば幸いです。

■主な受講対象

アクティブラーニング型授業（特に協同学習の技法を取り入れた授業）を行いたいと思っている教員。本プログラムでは基礎的な技法を扱いますので，特に授業経験の少ない教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングとはどのようなものか，また，協同学習とはどのようなものか，説明することができる。
2. 協同学習の技法（話し合いの技法）を3つ以上挙げて，その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に協同学習の技法（話し合いの技法）を取り入れることができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2302C

大学で地域課題解決に関わる教職員のためのエンパワーメント手法入門 ー地域課題の抽出と解決に向けての合意形成づくりー

■講師

前田 眞（愛媛大学 社会連携推進機構 教授 地域連携コーディネーター）

昭和52年3月広島工業大学工学部建築学科卒，平成4年7月邑都計画研究所設立，平成17年特定非営利活動法人まちづくり支援えひめ設立，それぞれの代表を務め，平成27年1月より愛媛大学社会連携推進機構にて地域連携コーディネーター就任。起業してから24年間にわたって地域活動や市民活動の社会的起業支援を実施してきて，まちづくり松山，お城下松山（松山市），まちづくり郡中（伊予市），川津南やちっみる会（西予市），シクロツーリズムしまなみ（今治市），河辺の未来を考える会（大洲市），西予市まちづくりアドバイザー，松山市コミュニティアドバイザーに就任する等のまちづくり組織の設立，運営支援に参画。

■プログラム概要

急速な人口減少，超高齢社会，少子社会，商店街に象徴される商業の衰退，地場産業の衰退など，地方は大きな転換点にさしかかっている。それらを打開するために，「地方創生」が叫ばれている。この地方創生の実現に向けては，各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な地域づくりが求められる。

大学においては，地域における課題解決への対応とそれに資する人材の育成が求められています。今回の講義では，地域課題の把握，解決に向けてのノウハウ取得と解決に向けた担い手づくりとして，地域住民をエンパワーメントしながら，多様な団体を巻き込んだ協働型事業の構築，合意形成に向けたマルチステークホルダープロセスの手法について，グループワークによる模擬的な演習を通して学びます。

この研修では，参加者の皆さんが日常的に経験している事例やそこに見られる工夫等もお互いに共有して行きたいと考えています。

■主な受講対象

1. 地域の課題抽出や課題解決に向けて地域住民をエンパワーメントすることに係わった経験の少ない教員の方を歓迎します。
2. 地域創生センター等の地域との連携事業に携わっている教職員。
3. 地域の課題解決や活性化に向けての活動に興味のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 地域の課題について説明できる。
2. 地域の強みや弱みについて説明できる。
3. 地域の課題解決に向けた一つのエンパワーメント手法についてわかる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

講義中心

プログラム番号 2302D

大人数講義のコツ (とくに授業初心者のための)

■講師

小林 直人(愛媛大学 学長特別補佐, 教育・学生支援機構 教育企画室長, 医学部 総合医学教育センター長 教授)

昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒, 平成 7 年東京大学にて博士(医学)の学位取得。平成 17 年度より愛媛大学医学部(医学教育学講座)教授, 平成 21 年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任, 平成 27 年度より学長特別補佐(教育企画や教職員能力開発を担当)。教育担当理事(教育・学生支援機構長)のもと, 大学全体の F D をミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。

■プログラム概要

本プログラムでは, 大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法, 学生を積極的に講義に参加させる方法や授業効果を高める方法など, 大人数の学生を聴衆とした「よい」講義をするために気をつけておかなければならない様々な授業スキルを, 事例や実習を通して習得することができます。

また昨今の高等教育に強く求められている参加体験型授業/アクティブ・ラーニング型授業の一例として, 受講者に実際にグループワークを体験していただきます。講義を受け持つようになって間もない教員の方はもちろん, 自分の講義を振り返りたいと思われる方, また職員の方々も是非受講してください。

この研修では, 参加者の皆さんが日頃実践している工夫も披露して頂きます。ご自分の経験(失敗談も歓迎です!)や他で見聞きした実践例を共有しましょう。きっと, 明日の授業に役立つヒントが見つかります。

本プログラムのキーワードは以下の通りです:

★講義の流れ:「導入」→「展開」→「まとめ」

★講義の要素:「説明」と「指示」と「発問」

★講義に求められるもの:「コンテンツ」と「スキル」と「タレント」

■主な受講対象

まだ講義経験がないか数年未満の講義経験しかない教員の方を歓迎します。また, 学務系の職員の方にとっては, 大学の講義に今求められていることについて考えるよい機会になると思います。

■本プログラムの到達目標

1. 学生にとって「よい」授業とはどのようなものかを具体的に説明できる。
2. 自分の経験に基づいて, 大人数講義のメリットとデメリットを列挙することができる。
3. 「学生中心」の大学の実現のためにより授業ができるようになる。
4. 大講義室ならではの様々な授業スキルを, 実際の体験を通して習得し自分の授業に生かすことができる。

■日時・場所

日時:平成 29 年 8 月 23 日(水) 13:00~15:00

場所:徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2302F

ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方

■講師

村田 晋也（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

九州大学大学院経済学府博士後期課程満期取得退学。九州国際大学経済学部経営学科専任助教を経て、平成 26年 9月より現職。現本務校において FD活動に加え、学生の能力開発（「愛媛大学リーダーズ・スクール」の運営）に携わる。文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム」事業推進責任者。専門は組織論，人的資源管理論，リーダーシップ論。

■プログラム概要

社会心理学者 K. レヴィンをはじめとした集団力学を専門とする研究者たちによってこれまで種々実証されてきたように、グループワークは、受講者が学習に対する積極的な姿勢を抱けるよう変化を促すのに有効な手法として注目されてきました。とりわけ同手法は近年、学校教育の場で広く導入されつつあることは周知のとおりです。しかし、一言で「グループワーク」とはいても、その実践方法は玉石混濁であるのが実態です。

そこで本講では、それら数ある手法のうち、高い効果が得られるとして良く知られているやり方の1つを体験して頂ければと考えています。これは、社会心理学者 E. アロンソンが 1978 年著書 *The Jigsaw Classroom*（松山安雄訳『ジグソー学級 生徒と教師の心を開く協同学習法の教え方と学び方』）の中で提唱した「ジグソー学習法」なるもので、この学習法を用いた授業の進め方とその効果を皆さまに紹介することを本セミナーの主たる目的としています。

■主な受講対象

今後、グループワーク手法を取り入れた授業を行うことを検討されている教職員の皆さまを歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. ジグソー学習法の基本的な仕組みについて説明できる。
2. ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方を体得し、授業で用いることができるようになる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

学生参加型授業の技法

■講師

西本 佳代（香川大学 大学教育基盤センター 講師）

広島大学教育学部第五類教育学系コース卒業，同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了，同研究科教育人間科学専攻博士課程後期退学。平成20年より香川大学教育・学生支援機構の特命助教として勤務。山口福祉文化大学（現・至誠館大学）ライフデザイン学部講師を経て，平成27年4月より現職。専門は教育社会学。

■プログラム概要

本プログラムは，これから学生参加型授業の技法を取り入れようと思っている教員を対象としています。近年，アクティブ・ラーニングの導入が求められる機会が多くなり，新たに挑戦してみようと思われる先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。けれども，実際に導入すると，グループワークが単なるおしゃべりの時間になったり，知識の伝達が不十分に終わったり等，学生参加型授業の難しさに直面することも多々あります。このプログラムでは，そもそもアクティブ・ラーニングとは何なのかという定義にはじまり，導入の背景，メリット・デメリット等の基礎的な内容について扱う他，取り入れやすい学生参加型授業の技法をご紹介します。その技法のいくつかを体験しながら，ご自身の授業への導入を検討していただければと考えています。

■主な受講対象

学生参加型授業の技法を取り入れようと思っている教員。本プログラムでは基礎的な技法を扱いますので，特に授業経験の少ない教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングとはどのようなものか，説明することができる。
2. 学生参加型授業の技法を3つ以上挙げて，その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に学生参加型授業の技法を導入することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）15：30～17：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2303C

質問を変えると授業が変わる？！

■講師

川野 卓二（徳島大学 総合教育センター 教育改革推進部門 教授）

1982年、大阪教育大学 大学院教育研究科修了（教育心理学, M. Ed.）。1988年、ユタ大学 大学院教育心理学研究科修了（学校心理学, Ph. D.; 統計学, M. Stat.）。1997年より徳島大学 大学開放実践センター勤務。2014年4月より総合教育センターへ異動。大学では2004年より全学FDを担当。

■プログラム概要

双方向の授業を行うことが求められていますが、なぜ私たちは講義の際に質疑応答のための時間を十分にとることを躊躇するのでしょうか？この研修では、より深い学生の学びを起こさせるために授業で利用できる効果的な質問技法について理解を深めます。

当日は、日頃、自分の授業で使っている質問を持ち寄り、それらを分類し、それぞれの効果について考えます。また、より深い学びにつながるように質問を書き直すグループワークの時間をとりたいと考えています。そして、それらの質問をどのように組み合わせて学生の学びを深めることができるか話し合うことで、参加者の皆さんの優れた質問技法を共有し、後期からの授業準備に役立つヒントを持ち帰っていただきたいと考えています。

■準備物や事前課題

授業で学生によく尋ねる質問（10個）をA4用紙1枚に記載し、必ずご持参ください。

■主な受講対象

授業の際、効果的な質疑応答の時間が持てていないと感じている教員や、より深い学びにつながる質問をしたいと考えている教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 授業で使用する質問が持っている機能について説明できる。
2. 自分の授業で用いている質問の型を分類できる。
3. 使っている質問を、学生の学びをより深める質問に変えることができる。
4. 使用する質問の型を授業の展開に合わせて適宜変えることができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）15：30～17：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

ダイバーシティの推進について

■講師

村上 弥生（香川大学 男女共同参画推進室コーディネーター 特命講師）

昭和 59 年奈良女子大学家政学研究科修了，短期大学講師，大学助手などを務めた後，平成 21 年京都大学にて博士（農学）の学位取得。和紙産地の経済史的研究において，発展には産地内のダイバーシティおよび競争・協力関係のあり方が関わっていたことを考察した。これを踏まえて，大学の男女共同参画や産学連携に関わってきた。

■プログラム概要

ダイバーシティの推進を考えるに当たり，まずはダイバーシティについて幅広い視点から認識することが必要です。このために日本の歴史や民俗，また世界の民族文化から，私たちが「常識」と考えているものとは違う生活や文化について学びます。

このような基礎的知識を持ったうえで，ダイバーシティとして制度的にも認められ始めている同性婚についてのグループワークを行います。最初に，これに対する自分の意識や意見を明らかにし，そのあとで講師から 1 つもしくは 2 つの事例紹介を行います。これらを踏まえてグループ討論を行い，グループ内の他者の意見，また他グループの意見を聞くことにより，再度自身の認識を確認します。

最後に，討論内容を総括するとともに，ダイバーシティ推進に際して根本的に必要であると考えられることを講義としてまとめますので，受講者は各自がこれを持ち帰り，業務遂行上に生かしてほしいと思います。

■主な受講対象

業務上，ダイバーシティを認識し，推進することが必要だと考えている方。

■本プログラムの到達目標

1. ダイバーシティということについて自身の持つ認識を明確にすることができる。
2. ディスカッションを通して他の受講者の認識を理解するとともに，それについて考えることができる。
3. ダイバーシティを，推進する「べき」ものとしてのみ把握するのではなく，理性的にとらえることができる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 23 日（水）15：30～17：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2303F

ルーブリック評価入門 ー考える, つくる, 活用するー

■講師

俣野 秀典（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員，高知大学総合教育センター講師を経て，2015年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。

教育評価や教育方法を中心に，FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として，学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップを開発・支援・実施。2010年より担当している本プログラムは毎年最高水準の評価を得ている。関連する著書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（共訳，玉川大学出版部）がある。

■プログラム概要

成績評価について，多様な評価基準を設定することが求められております。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では，“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し，配点30点とする”との例が示されたりしており，“ルーブリックって何??”と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは，成績評価の目的・意義から出発して，高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは，“目標に準拠した評価”のための「基準」つくりの方法論であり，評価指標として活用されます。本プログラムでは，学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

■主な受講対象

- ・ 目標に準拠した評価方法を習得したい教員。
- ・ 評価について関心のある教職員。
- ・ 協同型アクティブラーニングを体験したい教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月23日（水）15：30～17：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

**職員のための「前向きな職場づくり」入門
ー実践知を可視化, 活用するー****■講師**

宮林 常崇（公立大学法人首都大学東京 日野キャンパス管理部庶務係長）

修士（経済学）、民間企業を経て、平成22年4月公立大学法人首都大学東京へ入職。自己点検・評価、DP・CP策定、文科省出向、国際副専攻プログラムの立ち上げ、全学教務総括等に従事し、平成29年4月から現職。公立大学協会共通テキスト編集チームリーダー、名古屋大学高等教育センターSD研究会メンバー、大学教務実践研究会事務局長等を務める。

■プログラム概要

職員対象の研修等は、SD義務化も追い風となり年々増加していますが、研修だけで「異動のたびに業務がリセットされる」などの職場の混乱が解消されることはありません。現場の混乱を解決するためには、扱う業務の量・質の変化にも耐えうる「前向きな職場づくり」が不可欠です。

このセッションでは、正規職員が1名しかいない職場、家庭と仕事の両立に悩むスタッフ等々、現場のリアルな職場環境を前提として、「前向きな職場づくり」のために、ミドル層は何ができるか、何をすべきかを考えます。具体的には、前半で、業務改善や実践的な知識の継承に必要なスキルや事例を確認し、後半は「他者をサポートすることが苦手なスタッフをどうするか」等のケーススタディーを行います。SD義務化の理念を実現するために、現場で何ができるか考えるきっかけとします。

■主な受講対象

主任、係長、課長補佐相当の職員 もしくは 課・係単位の組織運営に課題を抱えている職員等。

■本プログラムの到達目標

1. 大学事務組織の特徴を理解し、自分の言葉でまとめることができる（例：三遊間のゴロが苦手）。
2. 課・係単位の業務改善と実践的知識の継承に必要な技術を身に付けることができる。
3. 前向きな職場づくりに貢献することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）10:00～12:00

場所：徳島大学常三島キャンパス

教職協働で学生を育成する ー学生をホンキにさせるコツー

■講師

岸岡 洋介（京都外国語大学 コミュニティー・エンゲージメントセンター 副センター長、外国語学部 講師）

平成 19 年度より愛媛大学教育・学生支援機構（研究員・特任助教：学生支援 GP）および教育学生支援部教育企画課（特定職員）において、学生リーダー養成プログラムに従事。その後、平成 25 年度より京都外国語大学において、大学間連携事業（19 大学）として学生リーダー養成プログラムを担当（大学間連携共同教育推進事業）。教職学協働でリーダーシップ養成研修の企画・運営等を行う。平成 29 年度より新設のコミュニティ・エンゲージメントセンター副センター長を拝命。

■プログラム概要

教職協働で学生を育成する機会は様々です。例えば、初年次教育やキャリア教育等の正課教育、就職や留学支援等の正課外教育、そのほか TA・SA、学習支援室、オープンキャンパス等の学生スタッフ育成など、その手法や在り方も多岐に渡ります。教職協働による学生の育成は、教育効果や運営上のメリットも非常に大きいため、アクティブ・ラーニングや学生支援を推進・充実させるための大きなカギを握る可能性があります。

本セミナーでは、「学生の学びを深めるためには、教員と職員それぞれがどのような役割を担い、お互いにどのようなコミュニケーションが必要か？」「学生のモチベーションを向上させ、主体的に行動するよう促すためのコツは？」等について、講義&ワーク形式で学びます。講師の経験談や事例紹介、受講生の皆さんとの対話やワークを通して、ご自身の実践に活かすヒントをお持ち帰りいただくことを目的にしています。

■主な受講対象

- ・教育経験や学生支援に未経験もしくは数年未満の教職員の方を歓迎します。
- ・教職協働で学生支援に携わっている方、または興味・関心がある方。

■本プログラムの到達目標

1. 教職協働で学生支援を行うメリット・デメリットについて説明できる。
2. 学生の学びを深める教職協働の在り方について説明できる。
3. 学生をホンキにさせるコツについて説明できる。
4. ご自身の実践に活かせるヒントを持ち帰ることができる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 24 日（木）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

■講師

秦敬治（追手門学院大学 学長補佐，教育開発センター長，追手門学院大学リーダー養成コース長，基盤教育機構 教授）

1986年3月に西南学院大学商学部卒業後，学校法人西南学院にて大学職員を20年間務め，2006年4月から愛媛大学にて大学教員に転身。愛媛大学では，教育企画室副室長としてFD・SDの中核を担い，SPODの立ち上げにも関わる。また，学生のリーダー養成にも関わり，愛媛大学リーダーズ・スクールや西日本学生リーダーズ・スクールの立ち上げを行った。2014年9月に追手門学院大学副学長に就任し，2017年4月から現職。学長補佐に加えて，FDの中核を担う教育開発センター長，学生リーダー養成を行う追手門学院大学リーダー養成コース長も務め，教員，職員，学生の能力開発に取り組んでいる。加えて，市民向けのリーダーシップ講座やキャリア形成支援を目的としたワークショップ等での講師歴も多く，松山市の経営者を中心とした志秦塾の塾長も務めている。専門は高等教育経営論（教育学博士）。

■プログラム概要

若手・中堅職員にとってどのようなキャリアを形成したいかを明確にすることは，人生の充実につながるだけでなく，日々の仕事の充実化にもつながります。

本プログラムでは，人生だけではなく，大学人としてのキャリア形成を支援する観点から，自身が求めるキャリアに関する理解を深め，どのような方法で実現していくのかを明確化する演習を行います。こうした自身のキャリアについて理解を深める手法は，学生や後輩指導においても活用することができ，これらの手法を修得することで，自身だけではなく周囲に対してもアプローチができるようになります。

具体的には，様々な自己分析手法を活用した，多様な視点からの自己分析を通じて，自身が重視する価値観やキャリアに求めているものについての認識を他者との対話から深めて行き，今後のライフプランとしてまとめていきます。

自身の目指すキャリアを明確にすることで，具体的な手段につなげ，理想のキャリアを手に入れるためにも，必要な手法や考え方を学んでいきましょう。

■主な受講対象

これから大学運営の中心を担うことになる，若手・中堅の大学職員を対象とします。また，学生指導や部下等のキャリア形成支援を行う部署等の教職員の受講も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 様々な自己分析ツールを活用した分析から，自身の特徴や傾向について，他者に説明することができる。
2. 自身のキャリアにとって，重視する要素について，具体例を用いて説明することができる。
3. 学生や後輩指導に必要なコツを活用して，他者の話を深めることができる。
4. 自身のキャリア形成に関して，キャリアに求める要素を踏まえたライフプランを作成することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2401D

理工系講義形式授業において 学生の学習を促進する授業デザイン

■講師

榊原 暢久（芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター／工学部 教授）
北海道教育大学（札幌校）小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士（理学）。旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師を経て、2007年度より芝浦工業大学工学部准教授。2009年4月より現職。ファカルティ・ディベロッパー、SDコーディネーター。
日本高等教育開発協会，大学教育学会，日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発（特に，理工系数学基礎教育や教員支援（FD）プログラム）。

吉田 博（徳島大学 大学院総合科学研究部（総合教育） 講師）
愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また，四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）のFD担当として，SPOD-FDプログラムの企画立案，調査研究に携わる。
日本高等教育開発協会，大学教育学会，初年次教育学会等所属。

■プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは，各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は，大人数，講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは，このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で，学生の主体的な学びや授業外学習を促進することに繋がるひと工夫を取り扱います。はじめに，授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し，その目標到達を測定する評価方法について考えます。続いて，具体的な授業の方法や課題について考えていきます。プログラムは，実際に取り組みされているより身近な実践事例を紹介し，講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで，自身の授業における課題解決のヒントや，今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。

■準備物や事前課題

参加者が担当する講義科目のシラバス1つ（講義を担当されていない教職員の方は，自校で実施している理工系講義科目のシラバス1つ）を持参のこと。

■主な受講対象

- ・自身の理工系の講義形式授業の中で実施できる，広い意味でのアクティブラーニングの手法を知りたい教員。
- ・自身の理工系の講義形式授業の中で行っているアクティブラーニングの取り組みを他の教員と共有し，改善のヒントを得たい教員。
- ・自身の理工系の講義形式授業を振り返り，基礎的な再構成の方法を知りたい教員。

■本プログラムの到達目標

1. 理工系基礎科目における講義形式授業の基礎的なデザイン方法を修得することができる。
2. 理工系基礎科目における自身の講義形式授業をふり返り，成果や課題，改善すべき点を明らかにすることができる。
3. 理工系基礎科目における講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで，自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

プログラム番号 2401E

**「クラウドファンディング」ちょっとやってみませんか？
— 科研費に変わる新たな外部資金獲得方法 —****■講師**

角村 法久（徳島大学 研究支援・産官学連携センター 特任助教）

平成 15 年 4 月から徳島大学に事務職員として採用、主として総務系の業務を担当する。平成 21 年 4 月から 3 年間、日本学術振興会へ出向し、主として科研費の審査委員選考業務を担当。平成 24 年 4 月から徳島大学に戻り、主として共同・受託研究の受入れ業務を担当後、平成 27 年 5 月から研究支援・産官学連携センターの特任助教として研究支援業務に従事している。

■プログラム概要

最近、研究費の新たな獲得方法として、クラウドファンディングを導入する大学が増えています。本講では、講義とワークショップを通して、クラウドファンディングの一連の流れを理解するとともに、挑戦者を支援する方（事務職員、URA 他）自身が、プロジェクト概要の作成を通して、適切な支援ができる能力の獲得を目指します。

1. 講義：クラウドファンディング概要（基本知識を取得・確認）
2. グループワーク：5 人（又は 4 人）で 1 チームを編成し、チーム毎に次の手順で作業を実施
 - ①自己紹介
 - ②グループ内で事前提出課題について、発表の上、質疑応答
 - ③グループ内で出た意見を参考に、あなたの考える理想のプロジェクトについて、概要作成
 - ④理想のプロジェクトについて、タイトル、リターン、目標金額を検討
 - ⑤ ③、④で検討した内容をグループ内で発表し、質疑応答
3. 総括：ワークショップのまとめ

■準備物や事前課題

事前に課題を作成・提出してもらいます。※後日、様式を配布

■主な受講対象

1. クラウドファンディング実施に際して、側面からサポートする必要がある方又は機関内でクラウドファンディング受入れ等を実際に行う方。（例：事務職員、URA 他）
2. クラウドファンディングに挑戦するかどうか思案している方。（例：教職員）
3. クラウドファンディングそのものに興味を持っている方、どのようなものか仕組みを知りたい方。

■本プログラムの到達目標

1. クラウドファンディングの基本的仕組み・流れを理解した上で、クラウドファンディング挑戦者にそれらを説明できる。
2. クラウドファンディング挑戦者に対して、①プロジェクト実施までにどのような段階があり、②各段階に応じて、どのようなサポートができるか、具体的に説明できる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 24 日（木）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

学年間のつながりを生み出す学習環境デザイン**■講師**

山田 嘉徳（大阪産業大学 全学教育機構 講師）

2013 年関西大学大学院心理学研究科修了（博士（心理学））。日本学術振興会特別研究員、関西大学教育推進部特任助教を経て、現職。専門は教育心理学。著書に「大学で学ぶということ―ゼミを通じた学びのリエゾン―」（ナカニシヤ出版）がある。「協同する教育の実践的研究」をテーマに全学（各学部教授会等）のFD研修会の講師を担当。またアクティブラーニングWG、ラーニングコモンズWGの運営委員を担い、協同的な学びをデザインする教育実践・研究に従事。学びを分析的に記述し、モデル構築をはかる質的研究の方法論にも関心を寄せる。

■プログラム概要

本プログラムでは、少人数の専門ゼミにおいて協同的な学びをより一層深めていくための「学年間のつながりを生み出す学習環境」を考え、デザインできるようになることを目指します。

本プログラムは、レクチャー編とワーク編で構成されます。レクチャー編では、協同的な学びをデザインするにあたっての理論的な背景を確認します。「学年間のつながり」を考えるための概念をおさえ、当該概念がなぜ「学年間のつながりを生み出す」ことに有益で、協同的な学びを下支えするのかについて考えます。また話題提供として、学士課程教育の一環として、3年生と4年生とが協同して学ぶゼミ活動を題材に、いかに理論が「学年間のつながりを生み出す」のに活かされてるかを確認します。そしてワーク編では、「学年間のつながりを生み出す学習環境デザイン」のあり方をグループで考えます。学位プログラム毎に異なる複数のケースを用いて、1年間の授業デザインについて、専門基礎の学びが、卒業研究（卒業論文）あるいは卒業プロジェクト等の学士課程教育の「集大成」としての学びへの接続が可能となるような授業計画について考えます。

■準備物や事前課題

本プログラムでは『アクティブラーニングのための心理学』[A. プリチャード&J. ウーラー（著）、田中（訳）、北大路書房、2017]をテキストに用いますので、事前に読んでおくことが望ましいです。

■主な受講対象

教歴や専門は問わず、広く学年間のつながりを生み出す学習環境デザインのための工夫とそれを裏付ける理論的背景をきちんとおさえておきたいという方の受講を歓迎します。

なお大学院を擁した講座制をとるゼミ（研究室）や人文・社会科学系のゼミとでは、そのデザインのあり方は異なると考えられますので、当日の参加者の専門性を考慮した上で、グループ編成を行う予定です。また専門ゼミは持たないが、広く異学年交流を通じた学習環境デザインそのものを考えてみたいという方の受講も歓迎します。「学年間のつながり」というある種のコミュニティの社会・文化・歴史的な人的リソースの活用、すなわち、つながりを生み出す、というところで、理論にきちんと裏付けられた知見が得られるようなプログラムを提供したいと思います。

■本プログラムの到達目標

1. 協同的な学びをデザインするための理論的背景となる考え方や概念が説明できる。
2. 学年間のつながりを生み出す学習環境を備えた1年間の授業計画を設計することができる。
3. 学年間のつながりを生み出す学習環境にまつわる教授・学習上の利点と配慮すべき点について教員側・学生側の視点から説明できる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）10:00～12:00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2402A

中堅職員のための問題解決型プロジェクトマネジメント

■講師

丸山 智子（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室，特任助教）
東京学芸大学教育学部教員養成課程卒業。Columbia University Teachers College，修士課程修了。博士（学術）。専門は，教育開発，プロジェクトマネジメント，リーダーシップ。平成25年10月より現職。教職員の能力開発に従事し，特にSD(staff development)のプログラム開発及び研修の運営・実施・評価などを中心に担当。平成25年度教職員能力開発拠点SDC/平成26年度SPOD-SDC認定。

■プログラム概要

日々、みなさんは、職場において様々な問題に直面しています。課や部署内で解決できそうなものや、組織的な対応が必要となる大きなものまで存在します。中堅職員のみなさんは、大学改革を促進させるため、これらの問題を放置せず、リーダーとなって積極的に解決していく姿勢が求められます。

この研修では、課・部署内または部署をまたいだメンバーでチームを形成し、問題解決型プロジェクトを成功に導くためのプロジェクトマネジメント技法を習得することを目指します。

プロジェクトは、不確実性の高い業務であるため、成り行きに任せていたのでは成功しません。特に問題解決型プロジェクトでは、問題視している対象がメンバー間で違った場合、徐々にチームが機能しなくなります。得た知識やプロセスを実際に活用できるよう、現在職場で抱えている問題をイメージしながら、進めていきます。

■主な受講対象

問題解決のためのプロジェクト立ち上げ、実践に関心のある中堅職員。

■本プログラムの到達目標

1. プロジェクトとは何かを説明できる。
2. 問題解決のプロセスを述べることができる。
3. プロジェクトマネジメントを職場の問題解決に活用できるようになる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

■講師

山田 剛史（京都大学 高等教育研究開発推進センター／大学院教育学研究科 准教授）
神戸大学大学院総合人間科学研究科・博士後期課程修了。博士（学術）。島根大学教育開発センター講師・副センター長・准教授，愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長を経て，2015年4月より現職。「大学生の学びと成長を促す教育・学習環境のデザインと評価」をテーマとして，教育・研究・開発・教職員の能力開発に携わっている。

■プログラム概要

なぜ学習の評価をするのでしょうか。学習の評価には，最終的な成績を評価する以外にも様々な目的や役割があります。本プログラムでは，学習評価の基本的基礎的知識である，学習評価の原則（何を，どのように，いつ評価するのか），学習評価の方法（どのような方法や特徴があるのか），よい試験を行うための留意点，学習評価の厳密化と効率化のためのツール（ルーブリック評価やポートフォリオ評価，ICTを活用した評価やピア評価など）といった内容について学びます。

実際に，自身の授業実践を元に学習評価を振り返り，抱えている問題や解決のための知恵などを参加者同士で共有しながら，学生の主体的な学びを促進するための学習評価について深めていきたいと思えます。

■主な受講対象

学習評価に関わっている教員。

■本プログラムの到達目標

1. 学習評価の原則を説明することができる。
2. 形成的評価と総括的評価の違いと重要性を説明することができる。
3. 多様な学習評価方法を知り，自分の授業で活用することができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2402C

学生支援に必要なカウンセリング入門

■講師

杉田 郁代（高知大学 大学教育創造センター 特任准教授）

平成 27 年度より高知大学に着任。専門は、教育心理学と高等教育における授業づくり、学生支援。臨床心理士、学校心理士。

吉岡 瞳（高知大学 研究国際部国際交流室国際企画係 係長）

平成 18 年高知大学採用。学務系業務に 10 年間従事し、医学部及び教育学部において約 6 年間教務担当として窓口業務に携わる。平成 28 年 4 月より国際系総務事務を担当。

■プログラム概要

「学生支援に必要なカウンセリング入門」では、学生対応する際に必要なカウンセリングの基礎知識と基本的な学内連携の方法について学びを深めていきます。日々の学生対応の中でよくある事例を中心に参加者の皆さんとワークショップ形式で対応案の事例検討を行います。学生との関わり方とその具体的な支援方法について、コミュニケーションの方法、会話の際に用いるカウンセリング技法、学生対応として対人関係の基礎的な知識（発達障害や精神障害を抱える学生への支援方法など含む）や基本的な学内連携方法を、実例やワークを通して修得することができます。

本プログラムは、参加型のアクティブ・ラーニング型授業形式で行い、知識獲得だけでなく、参加者の皆さんが日頃の窓口対応で実践している工夫やご自身の経験（失敗談を含む）や、日頃感じている違和感などを共有していきます。他大学等の事例を学ぶことは、大変有効な実践知で、自分の職場にも役立つ知識になります。参加された皆さんともに学んでいきましょう。

■主な受講対象

まだ学生支援や学生対応経験がないか数年未満の経験しかない教職員の方を歓迎します。学生に直接的に関わる窓口だけでなく、間接的に関わる部署の方も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 学生支援に必要なカウンセリングとはどのようなものを具体的に説明できる。
2. 基本的なカウンセリングの技法を用いて窓口対応ができる。
3. 学生支援における学内の連携方法について具体的に説明できる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 24 日（木）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

教育改革を担う教職員のためのリーダーセミナー
「教育改革戦略の多様化と自大学文脈の可視化に向けた組織開発
ーストーリーテリングの視点を交えてー」

■講師

川島 啓二（九州大学 基幹教育院 教授）

2015.3月まで 国立教育政策研究所高等教育研究部長。2015.4月から、九州大学基幹教育院教授・次世代型大学教育開発センター長。専門：高等教育論，教育行政学。最近は，教育組織，FD，学生支援など。九大での仕事：初年次教育科目（127クラスを統一シラバスで「均質」に展開）の運営&センターの運営&教育企画開発。9月より京都産業大学・共通教育推進機構教授に着任予定。

■プログラム概要

本プログラムは，国立教育政策研究所（H26-27年度）「大学の組織運営改革と教職員の在り方に関する研究」において実施されたユニークな事例調査（各大学の固有文脈やリソース，改革へのモメントの合成関数としての改革プロセスを描いたもの）で得られた方法と知見を，各大学において教育改革に向き合っている教職員のための能力開発プログラムとして（ストーリーテリングの手法を交えて）再構成するものです。ストーリーテリングとは，他者に理解してもらいたい問題意識や思いを，語り手の体験やクリティカルな出来事をベースにして再構成した「物語」を通して伝えることとされていますが，脱文脈・脱時間的な質保証アプローチが主流を占める今日の大学改革フェイズの中で，個人にとってのストーリーと組織にとってのストーリーを結ぶ「環」として，組織開発の基本を考えます。プログラムの流れは以下の通りで，グループワーク中心です。

①ショート・レクチャー

▼教育改善の方法論の多様化とその意味 ▼プロセス（自大学文脈）分析の事例

②ストーリーテリングについて

③自大学のストーリー作成&相互コメントWS

④コンテクストの可視化のために必要なこと：プロセスからストーリーへ

⑤ラップアップ&振り返り（内容は多少変更することもあります）

■準備物や事前課題

グループワークにおいて，それぞれの所属大学の教育改革の歴史（スパンは任意）をまとめてグループ内対話をしてもらうので，まとめるための材料・資料を持参して下さい。

■主な受講対象

各大学において教育改善のための施策に関わっている教職員。管理職的地位にあるかどうかは問わない。

■本プログラムの到達目標

1. 大学教育改善の施策や改革の歴史的展開とその意味を，一段深い次元で理解・説明できる。
2. 自大学の改革展開と文脈を記述し，上記の中に位置づけることができる。
3. ストーリーテリングの基本的な考え方を理解し，実践できる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2402E

ディープラーニングに誘うアクティブ・ラーニングの手法

■講師

立川 明（高知大学 大学教育創造センター 准教授）

2004年4月より大学教育創造センター所属。各種FDの企画・実施、オンライン学習支援システムの企画、改善、登録情報の更新を担当。

2007-2008年農学部と協力してアクティブラーニングを取り入れた情報リテラシー教育の改善を行う。2008年より化学の授業にTBLの手法を取り入れ、授業参観の受け入れや教授法の研修を行う。2009年よりSPODフォーラム研修担当講師を務める。

高知大学のTips集を執筆。2017年、オープンコンテンツ「アクティブラーニングの手法」を公開。

■プログラム概要

口頭で教える方法で、学生は実力を付けていますか？期末試験で良い成績をとれるのは、一夜漬けのおかげです。その知識、次の年度の授業ではもう忘れていませんか？

長く記憶に残る知識になるためには理解を伴うこと、アウトプットの機会があること、反復の機会があることが重要です。この研修では、高知大学で行っている化学の授業を例にアウトプットを中心にした授業方法を紹介し、ディープラーニングに誘うための参加型授業に必要な要素を紹介します。

以下のような内容をワークとレクチャーで行う予定です。

1. 初回の授業で何をすべきか
2. 授業の組み立てはどのようにすべきか
3. 試験紙法を体験する
4. 教員が注意すべき事は何か

■主な受講対象

- ・学生の成績を上げたい教員。
- ・知識を蓄えながら同時に様々な能力開発をさせたい教員。
- ・学生に能動学修をさせたい教員。
- ・教員になりたい学生に講義以外の授業法を体験させたい教員。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブ・ラーニングのための場づくりができる。
2. 失敗しないアクティブ・ラーニングの要素が言える。
3. 試験紙法とは何か同僚に説明できる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

教育実践を研究にする5つのステップ
—SoTLの理論と実践—

■講師

佐藤 浩章（大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 准教授）
専門は高等教育開発，技術・職業教育論。2002年に愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部講師となり，同大教育・学生支援機構教育企画室准教授，副室長などを経て，2013年10月より現職。著書に『大学のFD Q&A』（編著），『大学の質保証とは何か』（共著），『大学教員のための授業方法とデザイン』（編著），『学生と楽しむ大学教育：大学の学びを本物にするFDを求めて』（共著），翻訳に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（監訳）などがある。

■プログラム概要

本ワークショップでは，教育実践を研究するための方法を学ぶことを目的としています。大学教育実践とは，授業，カリキュラム，学生指導，FDやSDなど多様な実践を含んでいます。こうした実践に関与する教職員の中には，本当に教育効果があるのかと，自問する人たちもいるでしょう。あるいは様々な理由から，その教育効果を検証せざるを得ない状況にいる人たちもいるでしょう。本ワークショップはそうしたニーズに対応するものです。

パート1では，教育実践研究とは何かについて，SoTL (Scholarship of Teaching and Learning) の概念を使って理解します。

パート2では，教育実践研究の事例を紹介しながら，その実際を理解します。

パート3では，研究のデザインプロセスを説明し，自らの実践をあてはめることで，教育実践研究をデザインします。

パート1，2は講義法を用い，パート3は個人ワークとペアワークを用います。

■準備物や事前課題

どの教育実践を研究にするのかをイメージしておいてください（授業，カリキュラムなど）。

■主な受講対象

授業，カリキュラム，学生指導，FDやSDの実践に直接関わっており，その効果検証をしたいと感じている教職員。

■本プログラムの到達目標

1. SoTLの概念を説明できる。
2. 教育実践を研究にするステップを説明できる。
3. 自らの教育実践を上記ステップにあてはめることができる。
4. 自らの教育実践を研究にしようというモチベーションを高められる。

■日時・場所

日時：平成29年8月24日（木）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

学生が感じ、考え、それを学びにつなげる教育と学習支援**■パネリスト**

秦 敬治(追手門学院大学 学長補佐, 教育開発センター長, 追手門学院大学リーダー養成コース長, 基盤教育機構 教授)

1986年3月に西南学院大学商学部卒業後、学校法人西南学院にて大学職員を20年間務め、2006年4月から愛媛大学にて大学教員に転身。愛媛大学では、教育企画室副室長としてFD・SDの中核を担い、SPODの立ち上げにも関わる。また、学生のリーダー養成にも関わり、愛媛大学リーダーズ・スクールや西日本学生リーダーズ・スクールの立ち上げを行った。2014年9月に追手門学院大学副学長に就任し、2017年4月から現職。学長補佐に加えて、FDの中核を担う教育開発センター長、学生リーダー養成を行う追手門学院大学リーダー養成コース長も務め、教員、職員、学生の能力開発に取り組んでいる。加えて、市民向けのリーダーシップ講座やキャリア形成支援を目的としたワークショップ等での講師歴も多く、松山市の経営者を中心とした志秦塾の塾長も務めている。専門は高等教育経営論(教育学博士)。

俣野 秀典(高知大学 地域協働学部/大学教育創造センター 講師)

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015年より現職。放送大学非常勤講師(ファシリテーション入門)。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。「私たちは楽しみながら可能性に気づいていく」をモットーに、高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業/教職員がさらに学べるプログラムを開発・支援・実施しており、大学コンサル・教員コーチングの実績も多数ある。シンポジウムにはSPODフォーラム2014「大学人のためのリフレクション事始：人材育成研究・実践のフロンティアから考える」以来の登壇となる。

佐々木 奈三江(徳島大学 学術情報部図書情報課 総務係長)

平成3年3月岡山大学文学部哲学科卒 平成3年4月より徳島大学附属図書館勤務。利用者サービス、情報リテラシー教育担当が長く、講義と連携した授業を複数担当。また、学生協働として図書館内で活動する複数の学生団体の立ち上げに携わり、その後の活動をサポートしている。

■指定討論者

小林 直人(愛媛大学 学長特別補佐, 教育・学生支援機構 教育企画室長)

平成17年度より愛媛大学医学部(医学教育学講座)教授、平成21年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任、平成27年度より学長特別補佐(教育企画や教職員能力開発を担当)。

司会 宮田政徳(徳島大学総合教育センター 准教授)

■プログラム概要

SPODフォーラム2017の全体テーマは、「FeelingとThinkingをLearningにつなげる」です。昨今、文部科学省が高等学校だけでなく初等・中等教育(幼稚園・小学校・中学校・高等学校)においてもアクティブ・ラーニング(能動的な学修)を強く推進する方針を打ち出しています。アクティブ・ラーニングという言葉が注目されてその必要性が叫ばれ、その手法ばかりに目が行ってしまい、学生が何を感じ、考え、学びにつなげているのか、ということが置き去りにされているような気がします。今年のフォーラムのテーマが意味するところは、「学生が何かを感じ、その結果何かをしようと考えた時、教職員がその気持ちをいかに学びにつなげてあげられるか」です。そこでこのシンポジウムでは、学生が感じ、考えた時、教職員はいかに支援できるのかについて、シンポジストから次の3つの論点について発表して頂きます。(1)どのような取組、教育、支援ができるのか、(2)そのためには教職員はどのような能力や心がけが必要なのか、(3)その能力を開発するにはどのような方法が考えられるのか、です。秦敬治氏には大学組織の観点から、俣野秀典氏には教員の観点から、佐々木奈三江氏には職員の観点から、それぞれ事例発表・報告をして頂きます。なお、当日は3名のシンポジストの実践事例の発表・報告の後、質疑応答およびパネルディスカッションを行う予定です。

■主な受講対象

教職員(SPODフォーラム2017に参加される全ての方)

■本プログラムの到達目標

1. 学生の学習支援を考える際、どのような手法、工夫、注意点があるのか説明できる。
2. 学生の学習支援を行うには、教職員にどのような能力や心がけが必要なのか説明できる。
3. 学生の学習支援を行うには、どのような教職員能力開発のアイデアがあるのか説明できる。

■日時・会場

日時:平成29年8月24日(木)15:30~17:30

場所:徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2501A

部下を育てるメンタリング 一次の一步を踏み出させ、自らも気づくー

■講師

阿部 光伸（愛媛大学 教育・学生支援機構 講師，広報室副室長）
東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での15年の教員生活を経て，平成15年度から東北文化学園大学に勤務し学生課長，教務部長，学園事務局部長として人事評価を経験。現在，職場内人材育成をテーマにSDを担当。平成25年10月から現職。

■プログラム概要

メンタリングとは，メンター（※1）がメンティー（※2）に対して行う1対1のコミュニケーションです。行動を振り返り，相手から考えや答え，そして次にどうするのかを自分の言葉で語る状況に導き出すことを目的としています。

このプログラムでは，人材育成を学習（learning）の視点で俯瞰し，「メンタリング」が，組織が行う「人材育成」と自発的に行う「キャリア開発」を接続させることが可能な手法となりうることを紹介します。また，受講者の皆様にはワークを通じてメンタリングのポイントを理解していただき，気づきを促す手法を身に付けていただきます。

※1 メンターとは，賢明で信頼のおける相談相手のこと

※2 メンティーとは，メンターからメンタリングを受ける人のこと

■主な受講対象

課長相当職の職員を主対象としますが，人材の育成・指導・評価について関心がある方の受講も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. メンターに求められるコミュニケーション・スキルについて説明できる。
2. メンティーとの関係性を深めるコツを説明できる。
3. メンティーをエンパワーメントするメンタリングができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2501B

始めよう！アクティブ・ラーニング型授業 ー協同学習・図解の技法編ー

■講師

中住 幸治（香川大学 大学教育基盤センター 講師）

昭和 59 年 3 月奈良教育大学教育学部卒業。その後高等学校英語教員として勤務。授業の中で様々な協同学習活動・アウトプット中心の学習活動を実施。平成 26 年 3 月に広島大学にて博士号（教育学）の学位取得。平成 27 年 4 月より香川大学大学教育基盤センター講師となり、英語授業の他に能力開発部員として FD を担当。

■プログラム概要

多くの複雑な情報が錯綜する現代社会の中で、学生は情報を整理しそのパターンや関係性を発見する能力、部分間・又は部分と全体間の関係性を把握する能力等を身につけることが求められますが、図解はその有益な手段の一つです。図解により情報の解釈・理解・洞察等を相互関係の中で深めることができるだけでなく、自分の考えや理解度もより明確になります。さらに、簡単な言葉や短い語句を用いて行うため、様々なタイプの学生にも応用でき、協同学習においても有効な手段です。

この研修では、協同学習による図解を用いた授業技法を実際に体験することを通じて習得することができます。また、ワークショップを通じて参加者の皆さんの間で実践例等を共有して頂くことも合わせ、今後の授業へのヒントを持ち帰って頂ければ、と思います。

■主な受講対象

講義経験が浅い方、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実施を考えておられる、又は興味のある教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブ・ラーニングとはどのようなものか、説明することができる。
2. 図解の技法を 3 つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に図解の技法を取り入れることができる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 25 日（金） 10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

講義中心

プログラム番号 2501C

学生支援担当者のための法律に基づく 障害学生への合理的配慮

■講師

青野 透（徳島文理大学 総合政策学部・大学院総合政策学研究科 教授）
中央大学法学部，同志社大学大学院で学び，1988年金沢大学教養部助教授，1998年同法学部教授，2004年同学長補佐，広島大と名古屋大で客員教授。2015年より現職。大学教育学会理事。日本学生機構「障害学生支援についての教職員研修プログラム開発委員会」座長等を務める。季刊教育法や名古屋大学高等教育研究に合理的配慮に関する論文を掲載。

■プログラム概要

障害者差別解消法により，国公立高等教育機関は「障害者から」「意思の表明があった場合」「障害の状態に応じて，社会的障壁の除去の」「合理的な配慮をしなければならない」。それが努力義務である私立高等教育機関にも「大臣は」「報告を求め」「ることができ」，それに対して「虚偽の報告をした」場合は「二十万円以下の過料に処」される。社会的障壁の定義を手がかりに，そのような法律がなぜ制定されたのか，障害の有無に関係なく共に学ぶことができる高等教育機関はどうあるべきかについて，障害者権利条約などを紹介しながら解説する。次に，政府が示した「基本方針」をもとに，学生支援において不可欠な「合理的配慮」に関する法的知識を提供する。最後に，各国立大が公表した「対応要領」と「留意事情」のうち注目すべき事項を紹介し，どの高等教育機関でも予想されうる具体的事例を受講者とともに考察する。

■主な受講対象

学生支援を所掌としている職員，学生支援に関する委員会メンバーである教職員，現在（あるいは近い将来に）障害学生の担任等をしている（になる可能性がある）教員，および学生支援に関する学内研修を担当する可能性のある教職員を主たる受講対象とします。

■本プログラムの到達目標

1. 障害学生支援が高等教育にとって要の業務であり，「障害の有無によって分け隔てられることなく，相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現」に向けた高等教育の役割が大きいことを意識した支援が出来る。
2. 障害者差別解消法により，全高等教育機関に「社会的障壁の除去の実施についての必要かつ合理的な配慮を的確に行うため」「職員に対する研修」の努力義務がある。その研修を担当するための法的知識を獲得することが出来る。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2501D

経験を学びにかえる —学生・若手職員に求められる能力を考える—

■講師

塩崎 俊彦（高知大学 大学教育創造センター 教授）

昭和 62 年 3 月，上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻，日本文学。平成 19 年より高知大学大学教育創造センターで，FD 研修プログラムの作成・実施や授業支援に取り組む。総合科学系地域協働教育学部門教授。

■プログラム概要

学生の自発的な学びを促すためにアクティブ・ラーニングを導入した大学の授業が注目されています。インターンシップ等の学外での学びの機会も増えてきました。あるいは，スタッフ・ポートフォリオなどで自らの業務を振り返りながら，大学職員としての能力開発に繋げていく試みも見られるようになってきています。これらに共通しているのは，いずれも経験から得られた気づきをもとに次のアクションを起こす，という考え方です。

この研修では，「大学生や大学職員に求められる能力を考える」グループワークと「話し合いのプロセス」についての振り返りを通じて，経験のプロセスを見ることと，気づきを得るための振り返りについて，体験を通じて理解していただくことをめざしています。

1. オリエンテーション
2. グループワーク：30 分程度の課題達成型のグループワークを行います。
3. グループワークの振り返り
4. ミニ講義：「経験，プロセス，振り返り」

■主な受講対象

- ・授業にアクティブ・ラーニングの要素を導入している／しようと思っている教員。
- ・振り返りを職場の業務に活かしている／活かしてみたいと思っている職員。
- ・インターンシップなど課外の取組を学生の成長に活かしたいと思っている教職員。

※2時間の研修のほとんどがグループワークとなりますので，あらかじめご了承ください。

■本プログラムの到達目標

1. 大学生や大学職員に求められる能力について，理由とともに3つ説明できる。
2. 「話し合いのプロセス」に注目するために意識しなければならないことを説明できる。
3. プロセスについての気づきを本日の経験から説明できる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

**教務系職員としての実践知を増やそう
— 学びを促す学生対応とは何かを考える —****■講師**

竹中 喜一（関西大学 学事局授業支援グループ 教学IR室・教育開発支援室 主任）
平成16年3月大阪大学人間科学部卒業後、民間企業でのSEや営業支援の業務を経て、平成20年関西大学入職。学生による教育・学習支援制度の設計・運用、ICT活用支援、FD、SD、教学IR等を担当。また、現職在職中に名古屋大学で高等教育論を専攻し、修士（教育）の学位を取得。現在は大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程で教育工学を専攻中。

■プログラム概要

「何を教えたか」より「何を学んだか」が重要視される現在において、職員にも学生の学びを促す役割が求められています。この研修では、教務・学務系職員が窓口で対応しうるサンプルケースを用いて、どのようにしたら学生の学びを促せるかを受講者とともに考えていきます。通常、教務・学務系職員は正課の学びに関することを取り扱いますが、ここでいう学生の学びとは、正課外の学びを含みます。

本研修ではまず、「どのようにしたら学生に学びを促せるか」という問いを考えるにあたっての、基礎的な知識や態度を講義等で確認します。次に、グループワークを通じて、各大学の教務・学務系職員の学生対応の現状と課題を共有します。その後、サンプルケースを題材に、望ましい学生対応について考えていきます。最終的には、自大学での学生対応において今後も継続すべき点や改善可能な点とは何かについて、受講者が新たな気づきを得ることを目的としています。

■準備物や事前課題

所属大学の教務・学務系職員の学生対応において、すぐれていると思う点と、課題だと思っ点をあらかじめ整理しておいてください。

■主な受講対象

教務・学務系部門が取り扱う内容（履修や休学・退学など）について学生対応を行う職員。特に、学生対応の経験が1～3年目程度の職員を想定した内容にしています。それ以上の経験年数を持つ職員の参加も可能ですが、グループワークのファシリテーター等をお願いする場合があります。また、教務・学務系部門の能力育成に関心のある方の参加も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 学びを促す学生対応に必要な知識や態度とは何かを説明できる。
2. 学生対応において職員としてできることを具体的に説明できる。
3. これまでの学生対応を振り返り、今後継続すべき点と改善可能な点を発見できる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2501F

学生のモチベーションを高める授業デザインと実践

■講師

川瀬 和也（宮崎公立大学 人文学部 助教）

東京大学文学部卒業，同大学院人文社会研究科博士課程満期退学。修士（文学）。在学中に、「東京大学フューチャー・ファカルティ・プログラム（東大FFP）」を第1期生として履修。東京大学大学総合教育センター，徳島大学総合教育センターを経て現職。栗田佳代子・日本教育研究イノベーションセンター編著，『インタラクティブ・ティーチング』では，第3章「学習の科学」の執筆を担当した。

■プログラム概要

学生の学習意欲を引き出すために，どんな工夫ができるでしょうか。学生の学習意欲は，学習成果に直結します。また，授業への参加や授業外での学修を促すためにも，学習意欲を高めることは不可欠です。

このプログラムでは，「学習の科学」と呼ばれる分野での研究成果を踏まえた実践の方法についてご紹介します。学習の科学では，「価値」と「予期」が学習への動機づけに深く関わっていること，また，授業設計においても，これらの要因を考慮することが有効であることが明らかにされています。この理論を踏まえて，実際に受講者の皆さん自身の授業を改善するための工夫について考えます。プログラム後半では，私が実際に大人数授業や少人数の演習形式の授業で実践し成果を挙げている方法についてもご紹介したいと思います。

プログラムでは，グループワークを多く実施します。積極的にご参加ください。

■主な受講対象

- ・学生の学習意欲を引き出す授業に取り組みたい教員。
- ・アクティブ・ラーニングや授業外学修への取り組みを促したい教員。
- ・他の教員と授業実践における工夫や悩みを共有したい教員。
- ・さまざまな形式の授業に応用のきく理論を学びたい教員。

■本プログラムの到達目標

1. 学生の学習意欲を高める方策について，「価値」と「期待」という言葉を用いて説明できる。
2. 自身の授業に取り入れたい，学生の学習意欲を高めるための工夫を説明できる。
3. 学習の科学の知見を授業改善に役立てるためのコツを説明できる。
4. ワークショップ終了後も学び続けるためのネットワークを作ることができる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）10：00～12：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

プログラム番号 2502A

大学グローバル化と職員の英語力： 大学職員が自分の英語学習力をどう高めるのか

■講師

福田 スティーブ利久（文教大学 教育学部 准教授）

2002年から日本の英語教育に携わり、2014年度に英語教育の自律学習支援をテーマとして論文が受理され、学位取得。その間、自律学習支援に関連した数多くの論文や書籍を発表。

■プログラム概要

グローバル化を目指す大学にとって職員の英語使用は欠かせません。一方、多くの大学職員は自分自身の英語力に自信がないうえ、英語学習は大学時代から行っていない方が多いと聞きます。英語教育界の見解からすれば、誰でも英語力を高めることはできますが、英語力を高める方法はいくつもあります。学習する前に英語学習力を高める必要があります。第一に、言語習得・学習過程を知ることが大切です。特に、英語が苦手という方にとって、まず、英語はどのように身につくのかを考えながら、英語学習力の自信を高めます。それから、今後、自分にあった英語力を高める学習方法を考えます。

■準備物や事前課題

今までの英語学習経験を考える。

■主な受講対象

英語に対する苦手意識を持っている、学習の方法がわからない大学職員。

■本プログラムの到達目標

1. 英語学習に対する苦手意識を和らげる。
2. 効果的・継続的な英語学習のノウハウを習得する。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）13：00～14：30

場所：徳島大学常三島キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2502B

グラフィックシラバスを書こう

■講師

宮田 政徳（徳島大学 総合教育センター 教育改革推進部門 准教授）

広島大学大学院 文学研究科修了（英語学）。2001年10月より徳島大学 大学開放実践センター勤務後、2013年4月より徳島大学 教育改革推進センターへ異動。2014年4月より総合教育センターへ異動。徳島大学では、2002年より全学FD企画・運営を担当。SPODでは、2010年よりコア校徳島大学FD担当。

■プログラム概要

グラフィック・シラバスは、通常のシラバス（テキスト・シラバス）では表現できない学習内容をフロー・チャートやダイアグラムや樹形図を使って、一枚のマップで示したものです。学生はグラフィック・シラバスを見ることで、テキスト・シラバスでは分からなかった、毎回の授業目標・内容の流れとそれらの関連性を容易に理解し、授業全体の概念をつかむことが出来ます。一方教員にとっては、グラフィック・シラバスを書くことによって、授業全体の構造を視覚的に概念化し、毎回の授業をよりスムーズな流れで行うことが出来るようになります。

グラフィック・シラバスは喩えていえば、学部や学科の授業のカリキュラムを視覚的に表した「カリキュラム・マップ」のようなものです。このカリキュラム・マップで授業間の関連性がわかるのと同じように、グラフィック・シラバスでは、毎回の授業が授業全体の中でどの位置にあるのかが分かります。

本ワークショップでは、グラフィック・シラバスの概念、その意義や特徴を解説し、作成の仕方を説明した後、参加者皆さんに自身のグラフィック・シラバスを書き上げて頂きます。

■準備物や事前課題

参加される方は当日必ずご自分のテキスト・シラバスを一部ご持参下さい。

■主な受講対象

シラバスや授業を改善したい教員。

■本プログラムの到達目標

1. テキスト・シラバスとグラフィック・シラバスの違いを説明できる。
2. グラフィック・シラバスの特徴を説明できる。
3. グラフィック・シラバスを書き上げる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

■講師

川崎 克寛（徳島大学 COCプラス推進本部 推進コーディネーター・特別准教授）
1993年9月カリフォルニア州立大学(L.A)経営学部卒業。株式会社ワールドを経て独立。コンサルティング業務や地域創生事業等に従事。中小企業、自治体向けセミナー及び講演等も経験。また2011年より東日本大震災復興支援事業に従事。企業や地域の再興に尽力した。

■プログラム概要

徳島大学ではCOCプラス事業を通じた教育カリキュラム改革の一つとして、寺子屋式インターンシップの開発を進めています。

寺子屋式インターンシップとは、受入団体側にメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返しながら課題解決に向けた取り組みを行う少人数制の課題解決型インターンシップです。

平成28年度においては、この寺子屋式インターンシップの試行として半年間に渡る「実践力養成型インターンシップ」を実施しました。

この取り組みと今後の寺子屋式インターンシップの定着に向けて、受入団体との関係構築の進め方やプロジェクト組成、学内体制の構築方法等をはじめとする仕組み作りや今後の課題についての講義をワークショップを取り入れながら行います。

■主な受講対象

実践的インターンシップ導入に関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. プロフェッショナルとして自らの職業やその専門分野に自覚と誇りを持てるようになる。
2. 職場はもとより異業種の人々や他者との間で、十分なコミュニケーションができるようになる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

「発達の間」としての授業デザイン
ーパフォーマンス心理学入門ー

■講師

新原 将義（徳島大学 総合教育センター教育改革推進部門 助教）

平成 22 年横浜国立大学教育人間科学部心理発達専攻卒，平成 28 年筑波大学にて博士（心理学）の学位取得。専門は学習環境のデザイン。平成 28 年度より徳島大学総合教育センターに着任し，現在に至るまで全学 FD 及び大学教育改革の業務に従事している。

■プログラム概要

突然ですが，みなさんは「学習」と「発達」の違いについて，これまで明確に意識したことはあるでしょうか？

授業を「知識や技術を伝達する場」としてではなく，「学生が主体的・能動的に学習する場」あるいは「学生が社会とつながる場」としてデザインしなければいけない，ということについては，これまでもはや数え切れないほど議論が為されてきました。しかし，学生が自分から様々なテーマに取り組み，社会とつながる，という大きな問題として「学習」を捉えた場合，そこには全人格を巻き込むような「発達」的な視野も，自ずから含まれるのではないのでしょうか。こう考えたとき，学習環境デザインが学生の「発達」にいかに関与するのか，という観点が必要になってくるでしょう。

この点について，本プログラムでは近年注目されつつある「パフォーマンス心理学」という考え方をみなさんに紹介しながら議論を行いたいと考えています。これを機に，学生やみなさんの「発達の学習」について考えてみませんか？

■主な受講対象

全教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 「発達」と「学習」の関係について，具体的に説明できる。
2. 「パフォーマンス」の重要性について説明できる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 25 日（金） 13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

**学務系職員の基礎力講座
—教職協働における事務職員の役割—****■講師**

三好 信幸（徳島大学 学務部長）

昭和 53 年徳島大学に採用。医事系、会計系、庶務系及び学務系の業務に従事し、徳島大学教育企画室長、教育支援課長を経て平成 29 年 4 月から現職。国立大学法人化後は主に FD、教育改革等の支援を担当。

福川 利夫（徳島大学 学務部 教育支援課長）

昭和 58 年香川医科大学に採用。阿南工業高等専門学校、徳島大学において医事系、職員系、会計系、学務系、設置準備室の業務に従事し、大学改革推進課専門員、教育支援課副課長を経て平成 29 年 4 月から現職。

宮川 純子（徳島大学 学務部 学生支援課副課長）

昭和 62 年鳴門教育大学に採用。徳島大学に異動後は主に学務系の業務に従事し、医学部学務課専門員を経て平成 28 年 4 月から現職。JCDA 認定 CDA（キャリア・デベロップメント・アドバイザー）、特定非営利活動法人日本接遇教育協会認定接遇マナーインストラクター。

■プログラム概要

「大学のガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」（平成 26 年 2 月 12 日 中央教育審議会大学分科会）において、各大学による一層の改革が求められる中、事務職員が教員と対等な立場での「教職協働」によって大学運営に参画することが重要であるといわれています。

また、大学設置基準等の一部を改正する省令（平成 29 年文部科学省令第 17 号）が平成 29 年 4 月 1 日に施行され、大学の総力を発揮した円滑な大学運営のためには、教員と事務職員等とが連携・協働して業務に取り組むことが重要であり、教員と事務職員等との関係に係る各大学の実情に十分に配慮しつつも、教職協働の必要性について法令上明記されました。

本プログラムでは、学務系職員として大学等を取り巻く環境を把握し、グループワークを通して、教育改革や学生支援等にどのように関われるかという課題等を共有し、学務系職員としての基礎力向上を目指します。

■主な受講対象

- ・学務系職員で業務遂行に当たり課題を感じている職員。
- ・学生の成長に深い関心をもっている職員。
- ・将来、学務系の業務に携わりたいと思っている職員。

■本プログラムの到達目標

1. 高等教育政策の概要及び関係法令と学内諸規定との関連を説明することができる。
2. 教職協働における現状を把握し、課題を明確にできる。
3. 業務改善への意識をもつことができる。

■日時・場所

日時：平成 29 年 8 月 25 日（金） 13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス

**看護教員のためのアクティブラーニング(AL)入門
ー講義にALを組み込むー****■講師**

小林 忠資（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 特任助教）
名古屋大学教育学部卒業。同大学院教育発達科学研究科教育科学専攻満期退学。名古屋大学
高等教育研究センター研究員等を経て、2016年より現職。専門は、大学教育論、比較教育。
「アクティブラーニング入門セミナー」などの研修で講師を担当。著書に、『看護教育実践
シリーズ第3巻 授業方法の基礎』（共編著）、『看護のための教育学』（共編著）、『看護現場
で使える教育学の理論と技法』（分担執筆）、『アクティブラーニング』（分担執筆）などがあ
る。

■プログラム概要

アクティブラーニングという用語は新しいものです。しかし、具体的な技法をみていると、
看護教育において昔から取り組まれていたものもあります。たとえば、実習で経験を通して
学習していく方法は、まさにアクティブラーニングの一つといえます。演習や実習では既に
取り組まれてきましたが、今、求められているのは、講義にアクティブラーニングを組み込
むことではないでしょうか。

本プログラムでは、看護分野の講義にアクティブラーニングを組み込むうえでの課題と
工夫について考えていきます。参加者の皆さんの実践例や実践での工夫も紹介いただく予
定です。講義のなかにアクティブラーニングを効果的に組み込むための実践知を共有しま
しょう。

主に看護教員を対象としたプログラムです。しかし、アクティブラーニングを活用して講
義と臨床をいかに結びつけるかという課題は、他の医療・保健分野も共通して抱えています。
アクティブラーニングに関心をもつ他の医療・保健分野の教員の受講も歓迎します。

■準備物や事前課題

ご自身の講義でのアクティブラーニングの実践を振り返ってみてください。

■主な受講対象

- ・講義にアクティブラーニングの技法を組み込みたいと考えている看護教員。
- ・既に講義にアクティブラーニングの技法を組み込んでいる看護教員。
- ・アクティブラーニングに関心をもつ看護分野以外の医療・保健分野の教員。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングの特徴と課題を説明することができる。
2. 自身の講義に組み込むことのできるアクティブラーニングの技法を選択することができる。
3. 効果的な学習課題をつくることのできる。

■日時・場所

日時：平成29年8月25日（金）13：00～15：00

場所：徳島大学常三島キャンパス